

するものかも知れないが、冒頭に述べたように、その原因等については本篇では言及しないことにする。

5. 結 び

以上上川地方を中心に北海道北西部の自記雨量計資料をもとに降雨現象を解析した結果、次のようなことが云える。

- 1) 雨の降り方は低気圧や前線の動く方向と同じ方向に移動して行くものと、これら気圧系の動きとはまったく関係なく動くものの2とおりに大別できる。
- 2) 気圧系の移動に伴なって動く降雨波と、そのあとにおこった降雨波とでは、その速度をきめる要因が異なるようである。
- 3) 降雨は気圧系の動きに伴なうものより、これらの動きと無関係に動く方が例も多く雨量も多くなる。
- 4) 一度降雨がおこると、その後数日同じ地域で、同じ時間に雨の降りやすい傾向が持続する。このような持続性は他の気象要素においても認められる。
- 5) 時間雨量の分布からみた特性を異にする地域ごとの境目(降雨地界)は、上川地方においては、約30 km のほぼ等間隔に東西に走る線であらわされ、この線は地形と一致しないものようである。

筆をおくにあたり、前旭川地方気象台長木村耕三博士に終始御指導御鞭達を受けたこと、また上田豊治氏等旭川地方気象台防災業務課の諸氏および寿崎吉子さんに資料の整理について御協力を受け、札幌管区気象台、帯広測候所・岩見測候所その他道西地方の各気象官署より資料の提供について御高配を受けたことをここに記して、感謝のしるしとする。

参 考 文 献

- 1) 木村耕三・山本晃・上田豊治, 1962: 上川地方における降雨域のメソスケール解析, 天気, **9**, 187~193
- 2) 桜井兼市, 1962: 降雨セルの移動について, 天気, **9**, 361~365
- 3) 木村耕三, 1952: 気塊及び前線の解析法, 研究時報, **4**, 106~117
- 4) 岩戸次郎, 1961: 夏季農耕時間における上川地方の気温について, 測候時報, **28**, 219~222
- 5) 木村耕三・岩戸次郎, 1959: 上川地方の降雨地界上川地方総合開発期成会, 夏季降雨量調査書第3報, 5~8
- 6) 篠原武次, 1962: 降雨域の大きさとその間隔について, 天気, **9**, 194~196

天気の編集方針について

天気はその発刊当時においては、第一線の気象温度業務に従事する人々の調査研究の小論文をのせるのが主なねらいであった。そのほか解説、論文紹介、学会ニュース等ものせたいとした。

1956年1月に天気は気象学会の正式の機関誌として発足した。これに伴い天気は気象学会の公示・通知等をのせる新しい任務をもった。ただし前述して発刊当時の考え方はそのまま踏襲された。

最近5ケ年の天気の内容をみると、論文は件数・頁数ともに増しつつあり、一方解説は多少減る傾向にある。昨年における頁数の比率は、論文:解説:学会記事:雑件の順に 55:10:25:10 であった。

1964年5月に天気の編集委員が更改されたのを機会に、編集方針についての議論をし、その結果、まず読者の意向を知るためにアンケートを行った。

アンケートの結果は別項の通りであったが、残念なことには集った通数が少なかった。しかし、少数ながら回答をよせられた方々の意向を尊重して、さらに編集委員会で数回討論を重ね、その結果以下にのべるような方針

をたて、1965年1月号からその線に沿って進むことにした。

まず内容であるが、解説の頁数を多少増すように努力することを申合わせた。そのため、論文の頁数は多少減っても止むを得ないとした。

解説としては、最近の進歩、トピックス、各専門分野の問題点、総合報告、関連科学の動向、外国雑誌の論説の紹介、気象庁関係の観測法等の改正の解説、外国事情の紹介、シンポジウム関係記事等を採用したい。

気象界消息、理事会だよりなどは一括して「学会だより」という題目のもとに、理事会議事録、気象学会よりのお知らせ、支部だより、関係学会や関係機関のニュースなどを含めることにした。また地方だよりは中止することとした。

要するに大筋としては従来の方針を踏襲し、細部について多少の交通整理を行うという考えである。アンケートはひとまず終わったが、お気づきの点は今後とも遠慮なく委員までお知らせ下さるようお願いする。

(大田正次記)